

振り子に揺られながら「経営」を学ぶ

岩尾俊兵

商学部 准教授

「経営」の真理を探究する。岩尾俊兵研究会は、科学と哲学、理論と実践、客観と主観、抽象と具象など、あらゆる両極端を行き来する「知的格闘の場」。

お金持ちの家に生まれることが経営者の条件でしょうか？ 社内政治を勝ち抜くことが？ 他人を蹴落とすことが？ 他者から巧妙に奪うことが？

誰もが人前では「違う！」と答えるでしょう。学者の子供じみた問題提起だと思ってもいらつしやるかもしれません。とはいえ反対に、大人の世界は互いにだまし合い、奪い合い、憎み合うものなのだ……と、達観した気になつてみても「いつか自分も後ろから刺されるかも」という不安は消えないでしょう。

慶應義塾大学は卒業生の上場企業社長数・役員数ともに日本一を誇ります。大企業経営者一族の子息が多く通う学校でもあります。在学中に起業する塾生も多数存在します。さらに、公認会計士試験合格者数も半世紀連続日本一。司法試験合格者数も昨今は東大を超えて日本一に何度も輝きました。臨床医の医局勢力図でも日本一との呼び声もつまり、ご子息ご息女を慶應義塾に通わせるということは、会社のような営利組織から、監査法人、法律事務所、

病院などの非営利組織まで、経営者になる切符を与えているようなものです。

しかし、私自身を含めほとんどの方は、「経営ってなんなのだろう？」という疑問に対する本当の答えがいまだに見つかっていないのではないのでしょうか。経営者になることを期待されている塾生も、社会で活躍する塾員も、自身が経営者であられる親御さんも、経営とは何かという問いを真剣に考え続けなければ、個人にとっても社会にとっても害がもたらされるでしょう。

動物も競争します。でも、動物には経営はできません。人間だけが経営で幸福にも不幸にもなるのです。こうした問題意識の下、ゼミでは論語から最新の経営理論まで、人工社会シミュレーションから実際の企業での事業立案まで、座学と体験の両方で「経営」について議論しています。

すなわち、岩尾俊兵研究会は、科学と哲学、理論と実践、客観と主観、抽象と具象といった両極端を揺れ動く知的格闘場なのです。

理論と実践の融合を志す環境の充実

竹内 惇君 商学部4年

岩尾俊兵研究会では「論理モデルの構築」と「シミュレーションによる検証」を通して企業の現在までの経営活動だけでなく、その展望も分析対象としています。さらに研究会の特色として座学で習得した理論と分析手段に基づく論理的な実践を重視しています。例年、企業と新たな事業創造に向けて共同で取り組み、その過程の中で企業の経営活動中に存在する真理を実証的に追究・解明し、問題を解決していく科学的な姿勢を養っています。また、自主性を非常に重んじる先生の指導の下、学生が自身の興味に基づいて学問・課外活動などの自身の大学生活の経営に精力的に取り組める環境であることも魅力です。



素粒子から宇宙まで、階層を超えた普遍性を求めて

やまもと なおき
山本直希

理工学部物理学科 教授

クオークやニュートリノなどに関する素粒子・原子核物理から、初期宇宙、超新星爆発、中性子星などに関する宇宙物理まで、幅広く理論的な研究を行っています。

私たちの身の回りの物質を構成する基本要素である素粒子、宇宙の開闢から現在に至る進化、磁石や超伝導のよう物質の性質など、物理学は自然界のさまざまな現象を対象としています。また、一見すると異なる物理現象の背後に共通する数学的構造が隠れていることがあり、そのような「普遍性」を見出すことも物理学の重要な方向性です。私たちの研究グループでは、素粒子の集合体としての物質の成り立ちや宇宙における物質の進化を主な対象として理論研究を行っています。自然界の階層を超えた普遍性が研究を進める上で鍵になっています。

宇宙の開闢直後、宇宙の温度が数兆度を超えるような時代では、物質は現在のような原子や原子核という状態ではなく、素粒子がばらばらの状態で存在していたと考えられています。このような宇宙原始物質の時間進化を記述する理論はどのように書けるでしょうか。これまでの自分たちの研究で、この問題に必要な数学的枠組みが、固体

(結晶)の電気的・磁気的性質を記述する理論にあることがわかりました。さらに、その理論を少し拡張すれば、大質量星の進化の最後の爆発現象である超新星爆発の時間発展を記述できることがわかり、現在の主な研究の一つになっています。物理現象に潜むこのような普遍性のために、ある対象を調べることが全く別の問題を解決する糸口につながっていくのも物理学の醍醐味と言えます。

研究グループの学生は皆、素粒子から宇宙までのさまざまな対象について、お互いに独立する新しいテーマで研究を行っています。教員もまだ答えを知らない問題なので、学生が自分の手で行った世界で最初の計算によって、当初想定していなかったような「景色」が見えてくることがあります。具体的な解析で未知の現象の存在を理論的に予言すること、人々が初めてそれを認識できるようにする——このような形で人類の知識の断片に寄与していくことが、私たちの研究の意義だと考えています。

物理で自然を観るということ

花井奏太君 理工学研究科後期博士課程3年

山本研究室では、物理法則の普遍性に着目し、ミクロな素粒子からマクロな宇宙まで幅広い対象を研究しています。そのため、専門の素粒子・原子核物理に加え、物性物理や非平衡物理などの知見も総動員します。研究に用いる道具は「紙とペン」。純粋に計算と議論を通じて自然現象を探究することは非常に魅力的です。議論では、学生が教員から一方的に教わるのではなく、対等な研究者として意見を交わし、論理的に正しい結論を導くことを目指します。その過程で山本さんの鋭い思考やアイデアに触れることで、自身の物理的直観も磨かれます。こうして培われた「物理的な観察眼」は貴重な財産となっています。

